

中野力『人口論とユートピア：マルサスの 先駆者ロバート・ウォーレス』

柳 田 芳 伸

評者は著者とは研究交流を重ね、現在に至っている (iv,314)。しかし以下の寸評では、掛値なし、手心なしとしたい。それは、何よりも氏が既存の累積されてきた諸「先行研究」(105,126,137,189,283,293,295,200,307,308,309)をあれこれと睥睨しながらも、真摯に、かつ精力的に「ウォーレス〔1697-1771〕の全体像」(iii,5,6,76,310)に迫ろうとされてきた意欲的で、挑戦的な学究姿勢に強く胸を打たれたからである。また改めて言うまでもなく、評者は、今日では極めて精緻に描き出されてきているスコットランド啓蒙思想の諸相や全容にとどまらず、スコットランド近代史にも疎い。そのゆえに、今般の短評など恥の上塗りばかりか、門外漢による的外れな妄評と一蹴されてしまうかもしれない。こうした危惧にもかかわらず、あえて拙筆を執ったのは仮にも前途有為の著者に幾許かのエールや助言を送りえれば、望外の喜びとなるとの一念からに他ならない。

評者は久しく人口論の講義をも担当してきている。もとより、その一駒として、「(ヒューム＝ウォーレスの)人口論争」(i,101,104,193)を取り上げている。その際に持参、紹介しているのは田中敏弘「人口論争」(『イギリス哲学・思想事典』研究社、2007年、297-9頁)を手引きに、本著でも列挙されている永井義雄、田中、坂本達哉、天羽康夫による諸業績である(1-3)。著者も「モンテスキュー→ヒューム→ウォーレス→ステュアートという人口論史の流れ」(ii)をしかと視界に置きながら、その中で、「スコットランド啓蒙にとって重要な人物」(309)である「ウォーレスだけがそれほど研究がおこなわれていない」(ii、また1,6も参照)という状況に逢着し、「新しいウォーレス像を確立することを」(1)を念願して、只管「ウォーレス研究の単著」(ii,1,6)の実現に営為、邁進された。その貴重な汗の賜物が紛れもなく本著に結実したと称しえよう。

だからといって、本著は決して奇をてらった書ではない。あくまでも、「本書の

意図はウォーレスの全体像を考察することにある。細部においてはもっと研究したい、研究すべき議論もあった…ここで一区切りつけ」(iv、また312も参照) するという暫定的な企図である。とはいえ、「ウォーレスの全貌を描いた本書は、わが国のスコットランド啓蒙において未開拓な領域を切り開いた。…今後のウォーレス研究の出発点になると思われる。」(『マルサス学会年報』第26号、2017年、141頁)との天羽による評言は空言ではなく、至言といえよう。確かに、原著の出現は早々と異論を惹起させてはいるけれども(『経済学史学会ニュース』第49号、2017年1月、12頁や、森岡邦泰「マルサスは西洋古典をどう読んだのか」『マルサス学会年報』第26号、11頁、23頁註9)、評者もまた原著をウォーレスの経済思想やその形成の輪郭を描出、提示しようとした野心的な力作と位置付けたい。実際、原著は例えば、近業の岩本吉弘「ウォーレスの人口論と農業主義的商品経済構想の特徴」(福島大学経済学会 Discussion Paper Series, No.102,2018年1月)にも少なくない影響を及ぼしているように思われる(同論文10頁註205)。

さて、坂本が先に指摘したように、著者は『古代及び現代の人類の数についての論考〔以下―「人口論」と略記〕』(1753年)、『グレート・ブリテンの現在の政治的状况についての諸特徴〔以下―「諸特徴」と略記〕』(1758年)、及び『人類、自然、および神慮についてのさまざまな展望〔以下―「展望」と略記〕』(1761年)というウォーレスの「主要三著作」(2,127、また3,26も参照)の解剖に加え、エディンバラ大学に所蔵されている「多数の未公刊草稿や書簡を読み解くことにより、初期から後期〔ちなみに、著者は1745年を分岐点とした時期区分をなしている、15,47,53,77,189を参照〕まで一貫するウォーレス思想の本質」(『経済学史学会ニュース』第49号、11頁)の探究に尽力している。そのあくなき徹底さは卓越の域を超え、もはや凄絶の観さえ呈していよう。行論における多少の同義反復あるいは屢述、略言を気障りに感じる読者も存するかもしれない。しかし各所に配された墨痕、主張は圧巻で、説得的である。ここに、堀経夫から連綿として受け継がれてきた原典主義の精華を垣間見ることができよう。

このように、概して、著者が払った文献収集と書誌的詮索、およびその上に立った読解と論証は並々ならないと容易に察しえる。この点だけでも、脱帽の一言に尽きる。二、三の例を引かせてもらおう。「ウォーレスの伝記はといえば、『スコッツ・マガジン』(1771年と1809年)に掲載されたものくらい」(49註4、また129註3も参照)とさりげなく言及されている(その伝記的叙述については、9-15,102-3頁等を参照)。けれども、通常はノーラ・スミスの博士論文(1973年)で事足りりとしているのではないだろうか(ホント、イグナティエフ編著水田洋、杉山忠平監訳『富

と徳』未来社、1990年、515頁註65)。また、「ウォーレスの書簡」(98註4)の穿鑿も周到であろう。エディンバラ大学が収蔵するモンテスキュー宛の手簡に触れているし(129註2)、同様に同大学が作成された目録から漏れた書簡にも目を配っている。加えて、モスナー編の『ディヴィッド・ヒューム書簡集』(1954年)との関連等を教示してくれている(116)。それに、「出版されなかった草稿類」(74,128)についても、実に丹念に、かつ手際よく整理し、しかも可能な範囲で、各々の刊行時期に対する推定をなしている。山ほどの「宗教に関する草稿」(54)を逐一吟味し、「出版された説教」(74)を特定、選出していくだけでも、さぞかし骨の折れる地道な作業であったに違いない。

では、こうした研究方法に立脚して、著者は具体的に何を主たる対象にしているのでしょうか。設定の際、著者は虚心坦懐に「先行研究」から学び取ろうとしている。まずは、「日本でウォーレス研究は確かにそれなりに蓄積があるものの、それでもウォーレスの著作を個々に考察することで断片的におこなわれたに過ぎない。それに対して、海外ではウォーレス研究を網羅的にこなっている」四つの博士論文(上記のスミス論文、ディロンの1979年論文、ピータスンの1994年論文、コクランの1997年論文)が光輝を放っている(307)、にもかかわらず、「日本のウォーレス研究ではほとんど用いられていない。」(7)と大観する。ついで、国内では、天羽の『人口論草稿』(1745年)への取り組みにも目を止めるけれども(2,50註27,100註11)、永井がウォーレスの主要三著作のみならず、草稿である『従順な服従』(1754年)や『自由と専制が商業と技芸に及ぼす影響について』(1768年)をも視野に収め(51註41,99註6,183,188註6)、ウォーレス思想の基層をなしている「ウォーレスの宗教論を展開」し、さらには「ウォーレスのユートピア論はユートピアの設立を目指したものではなく、反ユートピア論であることを提示した」(2)点により注目する。

こう見通した上で、著者が一層強く「意識したのが海外の〔四つの〕博士論文」(iii)であると表白されている(307も参照)。なかでも、とりわけディロンの卓論に熱い視線を送り(3,7,34-6)、「ディロンはウォーレスの著作の『人口論』、『諸特徴』、『展望』の三冊に焦点を当て…ウォーレスの経済論を高く評価しており、特にウォーレスの経済論である『諸特徴』を詳細に論じている」(7)と評価する。同時にまた、「しかしながらディロンはウォーレスの草稿類をほとんど使用していない」(48)という暇疵を抱えていると評釈してもいく。そして、「『忠告』〔1745年〕が『従順な服従』と『諸特徴』と関係をもっている」(48)点に留意し(80-1)、『展望』の綿密な分析と検討を通して得た独自の観点から、「商工業を重視したこの三

著作のラインを描くこと」(48)で、永井や田中が積み残してきた難題、「農業重視、商工業批判の『人口論』と商工業を重視した『諸特徴』という二著作の矛盾」(2、また77-8も参照)の超克に立ち向かい、ひいては、「新しいウォーレス像」を構築、提起しようとする。

おおむね、以上が著者の主眼と目されはする。けれども、なおも著者の雄図を語り尽くしているわけではない。いみじくも、著者が「ウォーレスの思想にとって宗教論は不可欠である…宗教論を抜きにしてウォーレスの全体像を理解することはできない。」(76、またii,iii,5も参照)と明記しているように、著者が細事に至るまで浮き彫りにしている「初期穏健派」(75、また76註11も参照)に属した「ウォーレスの穏健主義」(15)の多様な諸側面や柔軟さを紹介してもいかなねばならない。しかしここでは論点を上記の主旨、取りも直さず、「農業重視のウォーレス像か、商工業も重視したウォーレス像か」(8,37,38,47,48,126,189,307-8)という点に絞り込み、ウォーレスの「牧師としての宗教論」(307)については、遺憾ながら、天羽や安元(『社会経済史学』83巻3号、2017年11月、121-3頁)による概評に委ねておきたい。もとより、それは専ら評者の浅学非才に起因してはいるけれども、併せて焦点を余りに放散させたくないという意図も秘めている。それゆえ、以下ではウォーレスの宗教論への直接的な論及はあえてなさない。

上述したように、著者がウォーレスの主意の究明に傾倒した精力は計り知れず、おいそれとは筆舌し難いけれども、強靱な問題意識をその胸の奥底に潜めながらも、事実上、永井の提示課題の検討から開始されているように推される。すなわち、著者は、「永井によると、ウォーレスのユートピア論は…ユートピアを批判するため、ユートピアは設立不可能であることを示すために考察したもの…永井の見解を参考にしながら、ウォーレスの『展望』におけるユートピア論の位置づけを明らかにしたい。」(191-2)と吐露している。そして実際に、「『展望』の全12章のうち、最初の4章を占めている」(190、また39,195,223,234,272頁も参照)と見立てるユートピア論の析出から着手していく。その帰趨として、「『展望』でのユートピアの議論」(26)は「商業社会では成立不可能であり」(4)、「想像上の議論」(5)あるいは「ユートピアという空想の話」(39)、もしくは「知的遊び」(305)であったと帰結する(206)。つまり著者の読解によれば、農業を中心とした平等社会で(193,201)、「さらなる知識の発展の見込める」(193)ごとき「悪徳のない社会であるユートピア」(217,246,270,279)は「過剰人口の悲劇」(206、また202,203,207,239,246,269,270,282-3,284,288,293も参照)から脆くも瓦解し(216,300)、反対に、「悪徳の存在する現実社会」(204)が眼前に立ち現われる、ウォーレスはむしろこの「〔死と〕悪徳

の必要性」(213,223,276)を説き(246-7)、「神義論(弁神論)」(210,217)を底部に配置し、議論を組み立てているというのである(217,272,279-80,294-5,298)。

そして著者は、農業との均衡を保持した「ウォーレスの商業社会における商工論の展開」(115)が如実に看取され、「商工業重視のウォーレス像」(49註2)が流露しているのは『展望』ではなく、フランスとの七年戦争(1756～62年)期に出版され(97,128,157,173)、「フランスに対するブリテンの優越」(38)を鮮明にした『諸特徴』においてであると標榜し(179)、「『諸特徴』の商業社会の擁護論がウォーレスの思想上軽視されてきた」(38)と慨嘆する。そこで、ディロンの卓見を導きの糸にしてではあるけれども、「『諸特徴』でウォーレスが奢侈と富の増大と結び付けていることに着目し、このような奢侈の増加による富の増加によって、ブリテンの国民は、名誉革命以前と比べて、快樂をより安易に、より多く享受している、ということを重要視している。」(35)という点に探究の糸口を見出し、「ウォーレスはブリテンの国力、富、生活水準は〔安全保障と自由をもたらした名誉革命以後〕増加している、ということを歴史的に証明した」(36)との見地に共鳴して(181-7)、これを持論の前提、機軸に据える。無論、この場合、あくまでも「ウォーレスの奢侈肯定は限定つきのもの」(177、また178,182も参照)であり、「ウォーレスの奢侈擁護は全面的に奢侈を肯定するものではないが、それでも、ブリテンの奢侈が行き過ぎていないという見解」(181)であると釘をさしていることも忘失してはならない。

おおよそ、上記のような『諸特徴』の理解に立って、著者はそれに先行する『従順な服従』や『人口論』に、果ては『忠告』に至るまで遡及し、照射、考察していく。『忠告』はスコットランドの高地人(の無教養な下層階級、22-3)たちが1745年に引き起こしたジャコバイトの反乱〔高地地方カロデンにおける戦い(46年4月)での敗北、23,81、なおこの様相については、W.ファルガスン著飯島啓二訳『近代スコットランドの成立』未来社、1987年、150-5頁、田中秀夫『スコットランド啓蒙思想史研究』名古屋大学出版会、1991年、88-96頁、T.C.スマウト著木村正俊訳『スコットランド国民の歴史』原書房、2010年、211-4、338-42頁、およびA.ハーマン著篠原久・守田道夫訳『近代を創ったスコットランド人』昭和堂、2012年、第6章等を参照)に冷水を浴びせんとした草稿で(85-6,93-5)、著者はその中に、「スコットランドはイングランドに比べると貧しい」(100註12)ものの、市民「革命以後スコットランドが豊かになっており、商業がそのことに貢献していることを認めるウォーレスの見解がすでに表明されている」(97)と読み取っていく。著者の診断によれば、『忠告』は「断片的」(98)で、「十分に展開されているわけではない」

(78)という憾みこそあれ、「ウォーレスの経済思想の源」(98)であり、「『諸特徴』の萌芽」(78)を感受させてやまない非出版物なのである。

次に、視点を従来「農業重視と考えられていた『人口論』にも商業重視の観点がある」(78)との創見に移すと、著者が「『人口論』は農業を中心とした古代を称賛したものであるが、決して現代の商業を全面批判しているわけではない。」(93,また98も参照)と概観しているのに寓目させられる。正しく、著者は『人口論』における人口減少の社会的原因を詳細に解剖し(105-8)、ウォーレスが「不平等な社会では農業だけでは人口を増加させることはできず、人口を増加させるには商工業を導入しなければならない」(112)と洞見し、かつスコットランドにおいても「商工業は経済発展をもたらす一方で、奢侈が行き過ぎるとそれはまた人々の〔道徳的〕墮落を導き、人口を減少させる」(113)と論を進めていることを抽出、注視している(106-7,109)。そして「『人口論』においても商業重視の見解があること」(38)を摘出、強調する(78)。紛れもなく、この点こそすぐさまの波紋を呼んでいる争点となっている本著の要諦、主点にほかならない。繰り返言になるけれども、著者の一力点は「ウォーレスは『人口論』で…奢侈を全面的に批判したのではない。奢侈による経済発展を導くことを認めている」(126)という点に存する。

出版されたものの(128)、「短いパンフレット」(124)で、「ほとんど注目されてこなかった」(127)とされる『従順な服従』もほぼ同系の書として片付けられている。すなわち、著者はそこでは「スコットランドが豊かになれたのは名誉革命のおかげ」(125)と説かれていて、「商工業による経済発展の賞賛」(128)を盛り込んだ小冊で、「『忠告』とほぼ同じ内容」(124)と判じている。この時著者にとってより大事であったのは、こうした見方が『忠告』、『人口論』、『従順な服従』、そして『諸特徴』へと脈々と貫流しながら、開花していく「ウォーレスの本心」(128)の持続であったと考えられる。

ここまでで、不十分であれ、評者なりにやっと高著の基部の一端をかいつまみ、露払いをなしたと思う。安堵感と共に、多少の印象や偶感も浮かんでくる。是非これも付記しておきたい。確かに、著者は匿名の書(2)である『諸特徴』における「奢侈による商業社会」(126)の独自の分析を主軸にして、それに先立つウォーレスの諸著作を克明に精査、検討し、ウォーレスの経済思想の特色やその形成過程を素描するのに奏功している。しかしそれは依然として粗い骨組み、あるいは骨子の点描にとどまっているように見える。著者も自覚されているように、ウォーレスと「ヒュームなど当時の知識人たちとの関係」(ii)を明瞭に浮かび上がらさねば、「ウォーレスはヒュームや他の知識たちと交流を深め、彼らの影響を受けることで

自分の見解を発展させていったに違いない。」(98、また122,127,132も参照)との洞察も掛け声倒れに終焉しかねない。なかでも、ヒュームとの知的交流の仔細は欠かせないであろう。とりあえず、坂本の『ヒュームの文明社会』に付託しているのは心腹に落ちはするけれども(2,187-8註3、また102も参照)、やはり「ウォーレスはヒュームの『技芸と学問の生成・発展について』〔1742年刊の『道徳・政治論集』の第2巻に収録された論文、その意味については、さしあたり、坂本前掲書199,244-7頁や、中才敏郎編『ヒューム読本』法政大学出版局、2005年、245-9頁を参看〕を参照しながら、自説の正当性を確認した」(183)といった着実な立証の積み重ねが求められよう。9章の「自由・必然論」にしても、『人間本性論』の第2巻(1739年)に収めてあるような「自由と必然」論とどのような関係にあるのであろうか(田中秀夫・増田みどり訳『ケイムズ 道徳と自然宗教の原理』京都大学学術出版会、2016年、解説333-41頁、また坂本前掲書249-50頁註10や萬屋博喜『ヒューム 因果と自然』勁草書房、2018年も参照)。

ウォーレスが『訴え』(1757年)で力説した「中庸の奢侈」(143、また142,154も参照)の喫緊に関しても英仏の奢侈論争(104)におけるその地歩を確定していく必要があるであろう。暗愚な評者には、わけでも、それとヒュームの「不道徳な奢侈」や「道徳的に最も無害な奢侈」(田中敏弘訳『ヒューム 道徳・政治・文学論集』名古屋大学出版会、2011年、222,228頁)との判然とした差異がわからなかった。ウォーレスは『道徳・政治・文学論集』を問題にするも、「『商業について』あるいは『技芸の洗練について』を批判対象に選ばず、銀行と信用についてのヒュームの見解に焦点を合わせていることが注目される」(クリストファー・ベリー著田中秀夫監訳『スコットランド啓蒙における商業社会の理念』ミネルヴァ書房、2017年、212頁)との所見の方が首肯できる。またそれはフォルボネの「国民の奢侈」やピントの「中庸な奢侈」とはどう異なっているのであろうか(米田昇平『経済学の起源』京都大学学術出版会、2016年、237-40,272-5頁)。興味は尽きない。ここでは、「奢侈に流れることにより広範囲に生じた腐食作用は、十七世紀と十八世紀のユートピアの主題に強く浸透した。」(グレゴリー・クレイズ著異孝之監訳『ユートピアの歴史』東洋書林、2013年、135頁)との示唆と、ジュースミルヒが2版『神の秩序』(1761-2年)の中で、奢侈「は傲慢さと虚栄からたえず増大するが、これは結婚の障害となり、人口増大を妨げる重要な原因となる。」と述べていることのみを付加しておきたい(岡田實『現代人口論』中央大学出版部、1996年、193頁)。

もう一つ感じていることがある。反復になるけれども、評者はまるきりスコットランド史に不案内である。本著のような最先端を示そうとする学術書という性格に

起因するのか、はたまた「ウォーレスの推測的歴史」(28,109)のためであろうか、本著には素人にとって難解な個所があるように思われる。その折、読者への手引き書に関するとは口や案内が親切であろう。厭わず例示してみたい。ウォーレスは牧師任免権 (patronage) に反対するものの、その立場はスコットランド教会の主流の穏健派に近く (132)、柔軟な長老会派の信徒で、かつ寛容を受け入れるイングランドの教会の広教派 (latitudinarian) から多大の影響を受けた穏健なカルヴァン主義者であったと大掴みされている (20-1, また53,75も参照)、しかし当時のスコットランド教会の海図 (例えば、小柳公洋『スコットランド啓蒙思想研究』九州大学出版会、1999年、16-7頁) が与えられていない。評者は慌ただしく、今関恒夫ほか『近代ヨーロッパの探究3 教会』ミネルヴァ書房、2000年、5章や、トマス・ブラウン著松谷好明訳『スコットランドにおける教会と国家』すぐ書房、1986年、177-99頁等に目を通し、紐解かねばならなかった。ウォーレスは「世俗の世界におけるケイムズの役割を教会社会ではたした」とされているだけに (坂本367頁註6)、イングランドの主教制教会 (その態様については、山本通『禁欲と改善—近代資本主義形成精神的支柱—』晃洋書房、2017年、第5章を参照) とは異なり、スコットランド教会の長老派制度 (presbyterians) では、牧師 (minister) を補佐し、信徒の代表者である長老 (presbyter or elder) が各信徒集会 (教区数は920余り) で牧師を選任し、その教会組織としては地方教会会議 (kirk session)、長老会議 (presbytery)、地域宗教会議 (synod)、総会 (general assembly) を設けていた等といった概説をも盛り込んで欲しかった (49註6の説明では不親切か)。また「穏健派知識人であるジョン・ヒュームが書いた悲劇『ダグラス』〔初演は1756年12月14日に52年に新設されたキャノンゲイト・コンサルト・ホールで行われた〕」(132) に関しても、然りであろう。天羽の『ファーガスンとスコットランド啓蒙』93-111頁に任せているのは諒恕できるとしても (155註10)、詩人の息子のアラン・ラムが1736年にエディンバラ〔55年のウェブスターの推計値では、人口は5.7万人、ちなみに第2位のグラスゴーは3.2万人弱〕のカラバルズ・クロウスに常設劇場を開設したけれども、教会からの反対に合い (ファーガスン前掲訳書320頁)、「1737年に検閲制度が制定され、2劇場〔人口600万を上回るロンドンにあったドゥルーリ・レイン劇場とコヴェント・ガーデン劇場〕体制が厳格に守られて演劇活動が規制されたために、劇作家の創作意欲が衰退して、18世紀中頃には道徳的感傷主義に毒された低級な作品しか作られなかった。」(新熊清『イギリスの演劇』文化書房博文社、2003年、271頁) という大勢も知得しておきたかった史実といえよう。ただし、ジャン-クリストフ・アグニュー著中里壽明訳『市場と劇場』平凡社、1995年に、ジョン・ヒュー

ムの名が一切登場しないのは少し怪訝ではある（同訳書232頁）。

さらに、ウォーレスが福音派牧師ウェブスターの数学的能力の手助けを受け、牧師の未亡人および孤児用の年金保険の作成に奔走したと記述されているにもかかわらず（13-4、また永井「第2版『人口論』のウェブスター、ウォーレス、フランクリン」『マルサス理論の歴史的形成』昭和堂、2003年、所収も参照）、ウェブスターの人口調査への論及はない。ウォーレスはこの推計値を過大とみなしてははずである（ファルガスン前掲訳書155頁）。この点も不可解である（こうした視点からいえば、A. Ian Dunlop ed., *The Scottish Ministers' Windows' Fund 1743-1993*, Saint Andrew Press, 1992, ch.2-3は事前の必読文献であったといえよう）。やはり、126万5千人強であったスコットランド人口は「一七五五年以降、一年につき〇・六パーセント増加した」（スマウト前掲訳書250頁）という趨勢を反映した何らかの記載が望ましかったであろう。最も痛感するのは、永井が『人口論』で「ウォーレスは、毛織物およびリンネルを『ぜいたくな衣類（fine clothes）』とみなし、十七世紀末より育成されてきたスコットランド織物業を奢侈品工業のうちにかぞえ」（『イギリス急進主義の研究』44頁）で、「ウォーレスのいう奢侈の実体」（同書39頁）に肉薄しようとしたのに対し、本著ではそれへの呼応が見当たらない。ウォーレスがどのような「スコットランド開発計画」（同書41頁、ファルガスン前掲訳書177頁も参照）を思い描いていたのかも含めて、飯塚正朝『「国富論」と十八世紀スコットランド経済社会』九州大学出版会、1990年、4章や関源太郎『「経済社会」形成の経済思想』ミネルヴァ書房、1994年、あるいは林妙音『スコットランド近代繊維工業の展開』晃洋書房、2017年などの成果を摂取し、明らかにしていただきたい。

拙評はまだ幕を下ろせない。まだ労作の掉尾を飾っている10, 11章を俎上に上らせていないからである。いよいよ筆鋒をこの点に傾注してみたい。ここでの著者の眼目は明白である。従前の「先行研究ではウォーレスとゴドウィン的人口論が関連づけられていた」（283、また309も参照）。しかし本著では、「先行研究で注目されてきたゴドウィンとウォーレスの思想の類似性ではなく、マルサスの初版『人口論』の先駆者としてのウォーレスを明示することを意図する。」（189）と表示されている。つまり著者「にとってはウォーレスとマルサスとの類似点は明白なもの」（iv、また42, 309も参照）であり、「マルサスの初版『人口論』の先駆者としてのウォーレス」（269, 295, 309、また副題やivも参照）を描き出すことこそ緊切であるというのである。

その手法も分明である。すなわち、著者の略図によれば、「従来の研究ではウォーレスの『人口論』に見られるような人口が等比数列的に増加するという見解がマル

サスの『人口論』に与えた影響」(48)について云々されてきた(9,189,294,299)、しかしながらそれらはなべてウォーレスを「悲観論者としてのマルサスの先駆者」(27)と把握しようとした学績にとどまる(26、なお例えば、1986年刊の王声多のマルサス人口論研究の36頁も同様)、これらの諸論に勝るとも劣らず(48)、『展望』で議論された人口論に基づいたユートピア批判という観点からウォーレスとマルサスを考察する」(9)ことが極めて肝要である(48,190)、とりわけ「マルサスがおこなったゴドウィン批判…平等社会が成立しても過剰人口から崩壊するという論理展開」(5)が『展望』に厳存していたことは断じて看過されてはならない、この要点に逸早く着眼したのが「ゴドウィンの『政治的正義』の大きな感銘を受けたヘイズリット」(298)であり、そのヘイズリットは「『展望』を詳細に引用し」(301)、マルサスの初版『人口論』における人口「理論がウォーレスの模倣である」(299、また301,304-5,309も参照)と提唱している〔なお、Joseph J. Spengler, "Malthus on Godwin's Population", *Demography*, Vol.8, No.1, 1971, pp.2-4もほぼ同様の問題意識に立ってはいる〕。

ざっと著者の目算を上記のように略記してみたが、著者が初版『人口論』の最後の2章での神学思想とウォーレスのそれとの比較考量している点(290-2)にはなお踏み込めてはいない。この欠の補充も含めて、最後に雑感を打ち明け、短評に代えさせてもらうこととしたい。確かに、「マルサスはウォーレスの何に影響を受けたのかは述べていない…『展望』をユートピア論としてマルサスは論じていない」(287)との想定には賛同できるし(293,298も参照)、かつヘイズリットの至言に導かれ(ハズリット著神谷三郎譯『時代の精神』日本評論社、1949年、208頁、またヘイズリット著神谷三郎訳『時代の精神』講談社、1996年、224-5頁)、「マルサスのゴドウィン批判は過剰人口という観点からおこなわれる。これはウォーレスのユートピア批判と同じものである。」(290)と帰結されているのも得心できる。しかしながらこのような所見は、ややもすれば、所詮P.ジェームズ女史編『マルサス人口論集注版』第2巻(1989年)のp.352から示唆を受けたもので、「マルサスの原理の重要な点は、ことごとくウォーレスによって先取されている。原理ばかりでなく、そこからの結論である空想的改善の無効の主張まで、ウォーレスのものである。」(杉山忠平「ウィリアム・ハズリットのマルサス批判」『季刊 社会学』7、東京社会科学研究所、1956年、13頁、また伊藤久秋『マルサス人口論の研究』丸善、1928年、256頁や白井厚『増補版ウィリアム・ゴドウィン研究』未来社、1972年、106頁註1も参照)との所見の焼き直しにすぎないと酷評されてしまうかもしれない。決してそうではないのである。著者はこうした見立てを具に立証しているのである。安ん

じて、初版『人口論』の「10章で論じられた仮想的なユートピアの崩壊論」（柳沢哲哉「マルサス『人口論』の形成と功利主義」『社会科学論集』第138号、埼玉大学経済学会、2013年、80頁）と「ウォーレスの『展望』で展開された議論」（309）には類似性があったと確言できよう（柳沢前掲論文74頁）。

とはいえ、諫言もある。幾らか掘り下げてみたい。ゴドウィンは無誤なく初版『政治的正義』（1793年）において『展望』から引用している（ゴドウィン著加藤一夫譯『政治的正義』春秋社、1930年、477-8頁、また吉田忠雄『社会主義と人口問題』社会思想研究会、1958年、93-4頁）。また「初版当時のマルサスがウォーレスを知ったのはおそらくゴドウィンの『政治的正義』によってであった」（永井「第2版『人口論』のウェブスター、ウォーレス、フランクリン」131頁）のかもしれない。しかしゴドウィンが財産制への攻撃の手を緩め、ヒューム流の議論を取り入れ、「安価な安楽品（*gratifications*）」を肯定的に受け止めていくのは2版『政治的正義』（1796年）に至ってである（白井厚前掲書195-7頁や、柳沢前掲論文74,79頁、また86頁註18）。しかしマルサスの方はその改訂には無頓着で（同論文75頁）、初版『人口論』においては富者における「せまくかたよった奢侈品（*narrow luxuries*）」（マルサス著永井訳『人口論』174頁）との認識にとどまっていた。マルサスが「国民的富からいっても国民的幸福からいっても、最も有利とおもわれるものは、人民大衆の間に奢侈が普及することであって、少数者における過度の奢侈ではない。」（吉田秀夫譯『各版対照 マルサス人口論Ⅳ』春秋社、1949年、174頁）と述べ、下層階級における奢侈を受容していくのは早くとも2版『人口論』からである（拙著『増補版 マルサス勤労階級論の展開』昭和堂、2005年、8-9頁註6）。この意味では、ウォーレスの「中庸の奢侈」観の初版『人口論』への陰影はなかったと言わざるをえない。マルサスは1799年の北欧旅行を機にウォーレスではなく、ヒューム、フランクリン、およびステュアートの著作に耽読していったと考えられよう（前掲書282頁）。

「最終の二つの章で素描した、人間精神についての理論は、著者みずからの理解のために、満足できるしかたで、人生の諸害悪の存在のほとんどすべてのものの存在を説明しているものである。」（永井前掲訳書15頁）と謳われている初版『人口論』の自然神学思想について、著者は「マルサスの神学思想とそれが人口の原理におよぼした影響」（1981年春季）並びに「マルサス、イエス・キリスト、ダーウィン」（1987年6月）と題したプレンの高論に触発され、『人口論』から細大漏らさずに当該文言を検出、整頓した橋本の卓説を参照しているように思われる（296註9）。中矢俊博『ケンブリッジ経済学研究』同文館、1997年、第1章はこの橋本の所論を含め当

時の諸論議を整理している。評者は著者も引いている「英国国教会の先輩たちの忠告に従って、マルサスは後日この神義論中のより異端な箇所（the more heterodox elements）のいくつかを削除した。」というウィンチの所説には共鳴している。ただこの異端の内実となると、諸説が紛々としている現状にある（久保真「マルサス『初版人口論』」『マルサス学会年報』第21号、2012年、103-6頁および柳沢前掲論文72頁を、あるいは『マルサス学会年報』第23号、2014年、93-4頁や同誌第26号、2017年、121頁の書評記事を参照）。こうした現下において、著者による神学思想に関連したウォーレスとマルサスとの比較対照はいかなる意味合いがあるのであろうか〔例えば、Oslington, Paul, *Political Economy as Natural Theology*, Routledge, 2017の通観などは示唆的であらう〕。

評者自身は全く別な箇所に引き付けられた。それは、ウォーレスが神の想像せられた「制限された大地」（212、また270,275も参照）の下で、大気の温度や太陽熱の変化があるとはいえ（27,123）、「自然、動物、人間世界は調和の取れたもの」（246）と想念していた点である（276-8）。ここからブルクナーの『動物組織の理論』（1767年）に先立つ『展望』を仮想できはしまいか。さらには、『展望』後に草されたとされる『性愛について、もしくは両性の性的交渉について』という主題の草稿にも目を奪われた。すなわち、ウォーレスがその中で、仮に女性過多の時代であったとしても、結婚や出生を促進するためには、現前の「不自然で破壊的な性関係」を打破し、離婚を公認するのを要用と唱え、「性的欲望と公共善と調和させようと試みている」と表示しているからである（42-3,219註10）。つまり、ウォーレスはブリテンの合理的な法定結婚「年齢は女性に関しては20歳、男性に関しては22歳〔24-26歳〕に固定されるかもしれない」（196、また219註8も参照）と語ってはいるものの、事実上ハードウイック結婚法（1753年）に対する辛口の批評（戦略結婚による弊害の是正）をもなそうとしていたのではないだろうか（中澤信彦「18世紀中葉～19世紀初頭のイングランド社会の結婚パターンとその思想的意義」『経済論叢』第191巻第1号、京都大学経済学会、2017年、4-8頁）。

最後に瑣末な私事、追憶の付加を寛恕してもらいたい。他の先学と列して、「一騎当千の強者」（久保芳和『コイン随想』創元社、2008年、115頁）と呼称されている故・市原亮平（1926-82年、なお詳細には、杉田菜穂「研究ノート 市原亮平の人口論講義」『経済学雑誌』第118巻第3・4号、〔大阪市立大学・経済学会〕69-80頁を参照）の訳書（アー・ヤー・ボヤルスキー編市原監訳『人口学読本〔下〕』玄文社、1977年）解説は吉田秀夫『黎明期の経済学』巖松堂書店、1936年の援用から起筆されている（同訳書215-6頁）。吉田は『展望』をも視界に入れていたと推考

されており（永井前掲論文131頁）、やはり巻末の参考文献への挿入が望ましかったように思う。またこと原著に限りはしないけれども、「人口理論」（iii, iv, 76, 172, 287, 298, 299, 300, 301, 304, 305）という語句の多用や「人口問題」（306註6, 307）という語法ももう少し工夫がなされてもよかったかもしれない（久保芳和編著『スミス・マルサス研究論集』大阪経済法科大学出版、1996年、215-7頁）。

（なお、本稿は、筆者が要望を受け、2018年10月6日に関西学院大学で開催された経済学史研究会・第245回例会で行った報告に基づくものである。当日は著者の中野力氏も参加され、種々の議論が交わされた。）

